秋田県立博物館研究報告第21号　51～56ページ　1996年３月

秋田県五城目町の雀館古代井戸跡から出土した黒色土器

船　木　義　勝*

１．はじめに

『秋田県遺跡地図（中央版）[1]』によれば、雀館古代井戸跡は秋田県南秋田郡五城目町上樋口字堂社に、雀館跡は五城目町高崎字八田にあり、両遺跡は地図上でほぼ隣接して記されている。また、『秋田県の中世城館[2]』では雀館跡を城館として「大麦丘陵の北端、馬場目川が湖東沖積低地へ流入する出口の南に位置し、標高30m、南北100m、東西170mの残丘である。頂部は平坦で周辺に１～２の帯郭が認められる。付近には県史跡雀館古代井戸跡があり、青磁、黄瀬戸片が採集され、砂沢城の出城説、シズメ館（鎮館）説などがある。」と紹介している。

雀館古代井戸跡の調査報告は豊島昂氏が『秋田考古学[3]』誌上で発表されたのが最初である。この報告によって「雀館古代井戸」跡は1963年（昭和38年）2月5日付けで秋田県史跡に指定され、その後史跡環境整備事業が実施され、現在常時公開されている。

1975年（昭和50）３月に刊行された『五城目町史』によれば、雀館古代井戸跡は1962年（昭和37）４月頃の耕地整理事業によって発見され、1972年（昭和47）10月には、五城目町の運動公園予定地となり、再度井戸跡の緊急調査がなされたようである。しかし後者の調査にかかる報告書は管見による限り刊行されていない。

ところで、雀館古代井戸跡の井戸の中から出土した土器類は五城目町の「環境と文化のむら文化の館」収蔵庫に保管されている。文化の館収蔵庫のなかで、雀館古代井戸跡から出土した遺物について調査した結果、黒色土器壺１点と土師器杯１点について確認することができたが、須恵器杯は註記がなく特定できなかった。

そこで本稿は、黒色土器壺と土師器杯について資料報告するとともに資料のもつ課題について問題提起しておきたい。

２．遺跡の位置

八郎潟の東側に広がる湖東平野、その中央を南北に走るJR奥羽本線の八郎潟駅から東方約2.5kmに五城目町の中心部が位置する。町の中央を流れる馬場目川は出羽山地を水源として西流し八郎潟岸に肥沃な沖積平野をつくり八郎潟に注ぐ。さらに第四紀潟西層を侵食して平坦な河岸段丘をつくり、その河岸段丘上に雀館古代井戸跡が位置している。周辺には県史跡岩野山古墳群、石崎遺跡など奈良・平安時代の遺跡が点在する。五城目町とその周辺地域は交通の要塞、物資交換の市場として、今もその面影を残している。

３．雀館跡の調査報告

豊島昂氏は『秋田考古学』第23号（1963年12月31日発行）に「南秋田郡五城目町発見雀館古代井戸址」として井戸跡と井戸の出土遺物について報告している。この調査報告は今日入手されにくい文献なので、ここに全文を掲載する。

＊　秋田県立博物館

「遺跡は太平山塊の西側、馬場目川によって開かれた谷の出口に近く沖積斜面、雀館公園前の水田から耕地整理中の27年早春に発見された。

井戸は厚板4枚を横に組み合わせた、所謂井桁積み重ねの形式。板の厚さは4cm～5cm、巾15cm～30cm、長さ1.2m～1.3mの杉材を使用している。大きさは内ノリで88cm×84cm、現存の井戸枠は二段、深さ45cm、このうち井戸底には30cmほど、こぶし大から幼児の頭ほどの丸石が詰められていた。

この井桁の外側には土砂の流入、井戸枠の保護のために割矢板が四方に立てられている。この矢板の状態から井桁は更にもう一段あったものと推定されるが、発見当初の管理の不充分から持ち去られている。

遺物は井戸底から須恵器-杯の完形品1個、他に黒色磨研土師片をはじめ多数の土器片が検出されている。

井戸の使用年代はこれら出土什器類の使用年代から平安初期を降らないものと推定されるが、より正確を期するためには、この井戸を中心とした集落址を確認調査する必要がある。

参考までに述べると、この付近は遺跡の多いところで本誌19号で報告した県史跡「岩野山古墳群」もある。

これを記すにあたり色々とお世話くださいました五城目中央公民館の皆様をはじめ、有志のかたがたに厚くお礼申し上げたい。

尚当遺跡は秋田県文化財として昭和37年度に指定をうけ、現在発見現地に上屋をかけて保存している。

付　県内発見古代井戸

雄物川町石塚　井桁の中に曲物を入れている。

男鹿市脇本字飯森　埋没家屋の附属

現在見ることの出来ないものとしては、本荘市芋川改修工事中や八郎潟干拓工事現場等伝聞していますが、工事のため調査をする機会を得ないうちに工事の犠牲になったのは誠に残念に思われる。」

以上が豊島氏の調査報告である。本文のなかで「27年」とあるのは「（昭和）37年」の誤植であろう。挿図として、井戸の平面図・側面図を掲載している。しかし遺跡の年代を決定する根拠となった出土遺物の記述は簡潔な文章だけで、実測図、観察結果などにふれていない。

『五城目町史[4]』は既述の事項について、調査経過を中心に事実関係をまとめているが、出土遺物についてはほとんどふれていない。

4．井戸跡出土の遺物

(1) 黒色土器（図4-1）

豊島氏の調査報告で「井戸底から須恵器-杯の完形品1個、他に黒色磨研土師器片をはじめ多数の土器片が検出されている」とあるうち「黒色磨研土師器片」とおぼしき土器1点を確認できた。この「黒色磨研土師器片」は内外面黒色処理された土師器のように観察されるものであり、黒色土器と呼ぶのがふさわしいほど体外面に丁寧な磨きのかかった土器である。

黒色土器は壺形土器である。壺の口唇部端が欠けているが、口径は約5.5cm位であろうか。肩の張りが少ない。胴の最大幅は中央～下半部あたりであろうか。色調は体外面、体内面、器壁断面ともに均一な黒色である。器壁断面の観察から、「内外面黒色処理」という焼成後の二次的処理された「黒色」ではなさそうである。むしろ一次焼成の結果として黒色土器となったように見受けられる。胎土は全体に小石（6×2×4mm）数個、径2mm以下の小石が数個、粗砂（径1～0.5mm）が全体の15～20％含有されている。器壁断面の粒子をみると粘土が葉片状に剝離するように観察される。土器の表面（体外面）はロクロ調整による丁寧な磨きがあり光沢のある黒色

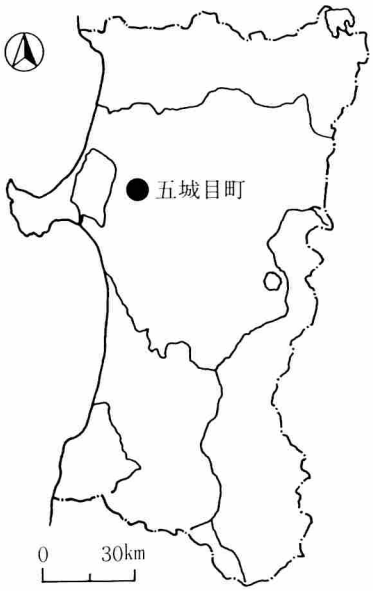

図１　五城目町の位置

である。体内面は粘土紐巻き上げかどうかわからないがロクロ成形の調整痕跡がよく残っていて、肩部まで成形した後、口縁部を積み上げ接合したのあろう。また体内面には淡黄ないし浅黄橙色の粘性土が付着しているが、この土が壺容器に付着していたのか、廃棄以降の段階で付着したのかわからなかった。

(2)　土師器（図４－２）

土師器には「井戸37.7.7」と墨書の註記があるから、「昭和37年7月7日、井戸の中から出土した土器」と解して間違いないであろう。

土師器はロクロ成形の杯形土器で、いわゆるあかやき土器・赤褐色土器・ロクロ土師器などど呼称されているものと同種である。

土師器の法量は、口径12.8cm、底径4.8cm、器高4.65cm、底径指数0.375、高径指

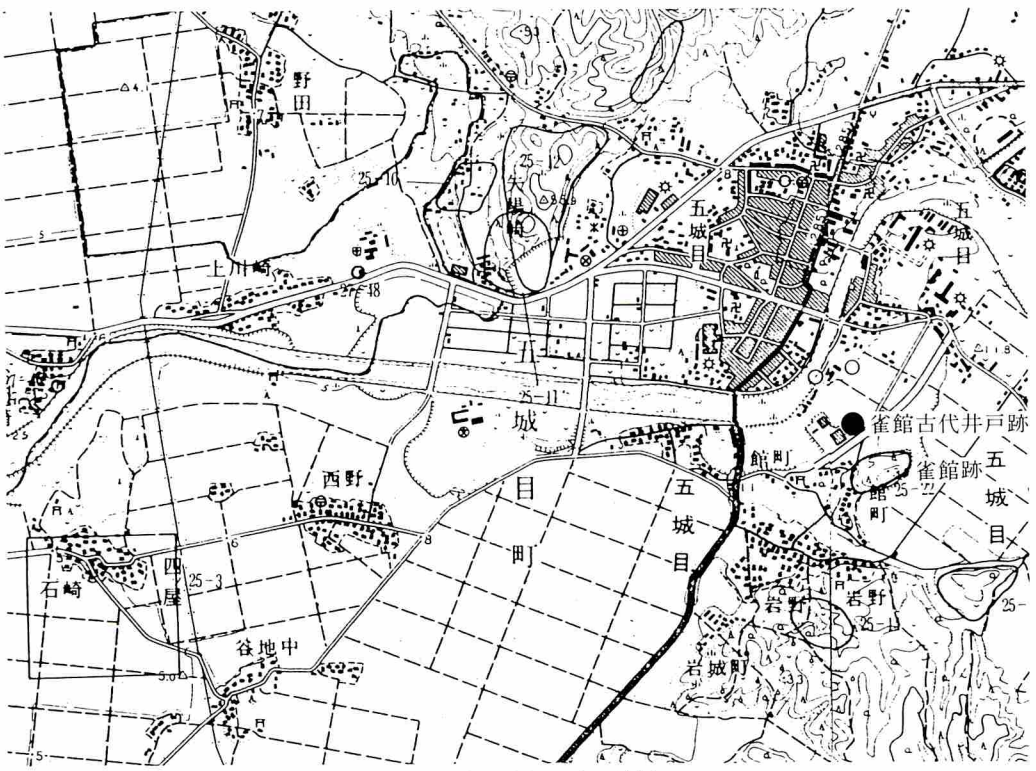

図２　雀館古代井戸跡の位置

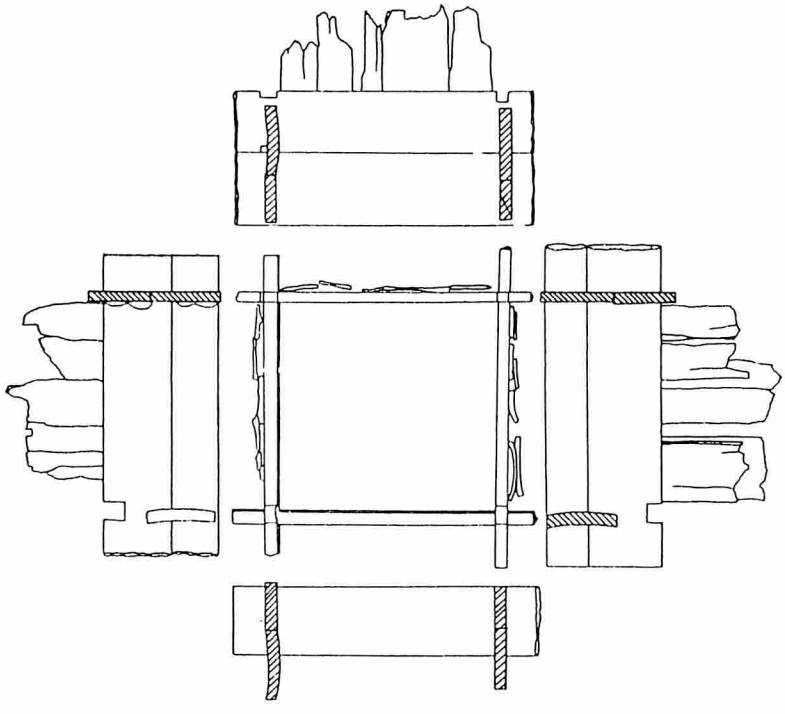

図３　雀館古代井戸跡（1/30）

数36.3、外傾度35～37度である。色調は火力を強く受けた口唇部はにぶい橙色で、体内面中央と底部・底面などに黒斑がみられる。底面の切り離しは回転糸切りである。

(3)　黒色土器と土師器の類例と年代

黒色土器壺と土師器杯の共伴関係は発見の時期が異なることもあって明らかでないが、同じ井戸のなかから出土した土器とみてよいであろう。しかし同じ井戸から出土した土器であっても、井戸という遺構の性格からみて同時期の廃棄と決めるわけにもいかない。

土師器杯は秋田城跡をはじめとして、県内各地から普遍的に出土する土器であり、法量などからみて９世紀代の製品とみなすことができる。

黒色土器壺の廃棄年代は、井戸から出土した土師器杯と豊島報告の「須恵器-杯の完形品」が手がかりであるが、須恵器杯の所在が不明である。秋田県における須恵器生産は８世紀中葉から10世紀前半としてよいから、この時間の範囲内であろうが、周辺地域の須恵器生産の状況からみて８世紀中葉から９世紀までの範囲とみてよいのでなかろうか。そこで土師器杯の年代をかさねれば、９世紀代にピークをもった廃棄年代とみなしておきたい。

５．黒色土器のもつ課題

雀館古代井戸跡から出土した黒色土器壺の生産地について渤海産の可能性を最初に指摘したのは北海道余市町教育委員会の宮宏明氏である。宮氏の指摘を受けて渤海産の根拠を胎土分析に求めてみた。この分析結果は本研究報告に掲載させていただいた奈良教育大学の三辻利一教授のレポートである。三辻教授による黒色土器壺の胎土分析は「秋田県産の黒色土器の可能性が強い」という結果である。

上記を前提とする時、いつ頃、どのような人が黒色土器壺を製作したのであろうか。この黒色土器壺と同じような形態をもつ壺は、奈良・平安時代をとおして北陸・東北地方に拡大しても類例をみない資料でなかろうか。今後、類例資料の発見に努力しなければならない。同時に率直に言えば、黒色土器壺は、北陸・東北地方の伝統のなかから生まれてきたものではなく、おそらく渤海など「北の海道」を経由して秋田の地に入ってきた「人」が秋田の土でつくったのでなかろうか，などど思えてならない。

註

1　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（中央版）』1990年（平成２）3月
2　秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981年（昭和56）3月
3　豊島昂「南秋田郡五城目町発見雀館古代井戸址」『秋田考古学』第23号　秋田考古学協会　1963年（昭和38）12月31日
4　小野一二『五城目町史』五城目町史編纂委員会　1975年（昭和50）3月31日
5　新野直吉『古代日本と北の道みち』高科書店　1994年（昭和６）11月30日

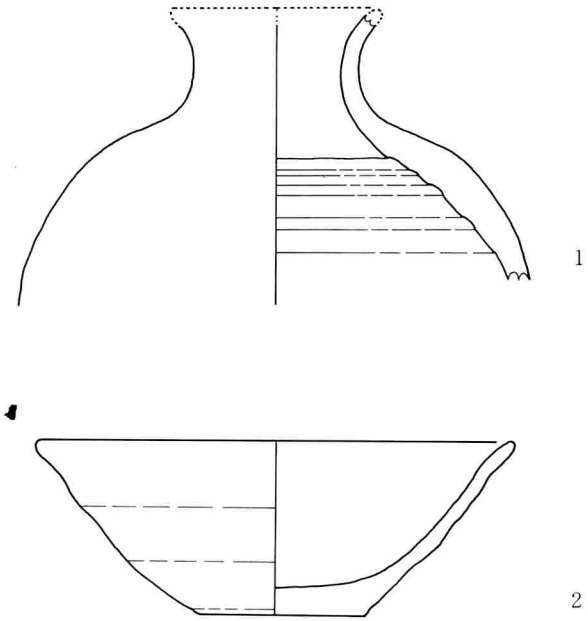

図４　井戸跡出土の遺物（1/2）

写真１　黒色土器（体外面）

写真２　黒色土器（体内面）

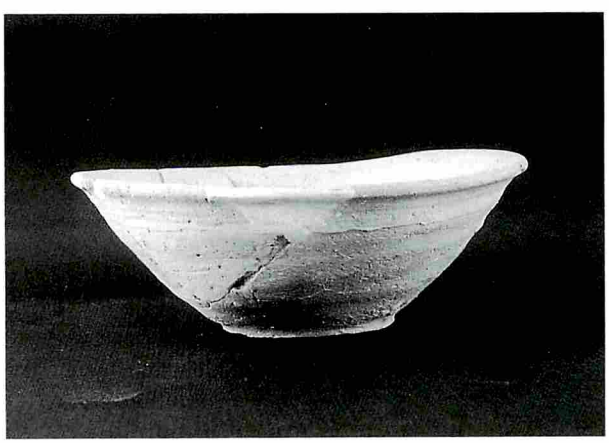

写真３　土　師　器